

九州大学

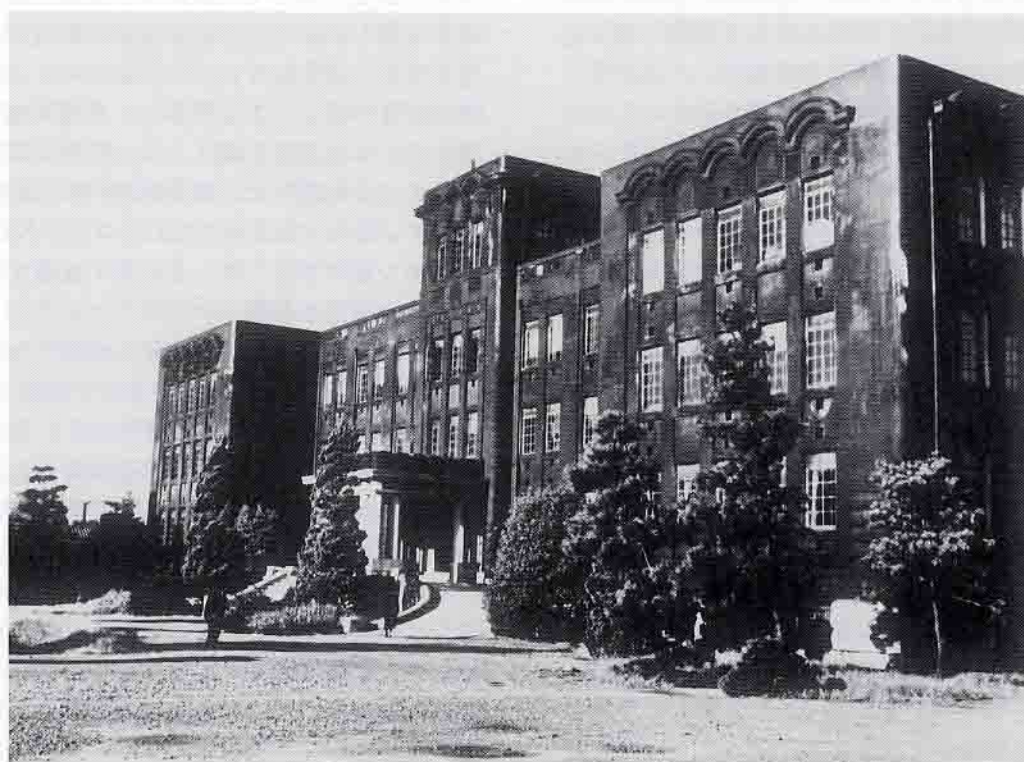
大学史料室ニュース

第2号

1993. 9. 20.

目 次

大学史研究の意義と方法	2
史料紹介(2)	4
沿革史紹介(1)	6
受贈図書一覧	7
大学史料室日誌抄録	8



終戦直後の法文学部建物

本学の法文学部は1924年（大正13）9月に創設された。この建物は同年4月に建築が始まり、2年後に竣工したものである。鉄筋コンクリート3階建、建坪722坪500。設計は建築課長倉田謙。現存する建物のなかでは最も古いものである。竣工当時は白亜の建物として有名であったが、空襲を避けるため、戦時中に写真のような黒色の迷彩が施された。現在でも灰色の姿を正門近くに見ることができる。竣工直後に本部事務局が一部を使用したほかは、法文学部専用の建物であり、戦後は法文経建物と呼ばれていた。1964年以降、応用力学研究所、生産科学研究所となり、一時施設部も入っていたが、研究所の筑紫地区への移転後は、言語文化部箱崎分室や大学史料室などに利用されている。

大学史研究の意義と方法

— 九州大学五十年史を編集・執筆して —

川 添 昭 二

昨年(昭和37年)の12月、九州大学七十五年史編集室が改組され、九州大学大学史料室が発足したという。今回その史料室ニュースに、五十年史編纂時の思い出を書くようにとの御依頼を受けた。五十年史編纂にたずさわった者として、そのあらましをふり返り、大学史研究の意義と方法についても若干の試見をのべてみたいと思う。

『九州大学五十年史』(全3巻)が出版されたのは、いまから25年以上も前の昭和42年11月であったが、この刊行計画自体は、さらにそれ以前の昭和35年10月、「九州大学創立五十周年記念会」が発足し、その事業の一環として記念出版会が発会したときからはじまった。各部局の委員で構成される出版委員会は、昭和35年12月開催の第1回会合で委員長(青山道夫法学部教授)の選出を行い、第2回会合で小委員会の設置を決めた。この小委員会は五十年史を通史と学術史(上・下)の3巻で編集する方針を立て、以後はこの小委員会で具体的な編集内容が検討された。第3回出版委員会では、五十年史の記述を九大創立50年目の昭和36年5月現在とすること、組方・発行部数・経費などのことが検討されている。

通史の執筆および全巻編集の直接担当者には、私が全学運用定員の専任講師として専従することになった。昭和37年6月から附属図書館の教官閲覧室が五十年史の編集室にあてられ、教務員の中野健氏と五十周年記念会の中山雅子さんが編集作業を助けてくれた。こうして五十年史の編集は緒についたが、当初は昭和37年8月末で学術史の原稿を集成し、学術史ができたところで通史を編み、年史全体を整える予定であった。しかし、すでに年史が出されていた医学部をのぞいて、他の部局ははじめてのことであり、最初に予定した原稿締切期限にはとうてい間に合わなかった。大きな戦争を中にはさんで、大学の基本資料にも欠けるところがあり、結局青山委員長の在任中には、原稿全部は集まらなかった。

その後、一、二の部局をのぞいてほぼ原稿が集まったので、小委員会で提出原稿の調整にあたった。小委員会は執筆要項を決め、各教室の年数や規模に応じて原稿枚数を示したが、記述について

は各部局の独自性を尊重した。

通史編集の経過は次のとおりである。編集が開始される直前、文学部箭内健次、理学部村主恒郎、教養部今来陸郎の3教授が通史編集委員になられた。3委員は、通史編集全体の計画・指導をされ、全編の構成を検討された。執筆の段階に入ると、問題となるべき箇所の記述について、筆者の提出した原稿に基づいて共同の討議が行なわれた。なかでも、文学部の箭内教授には相談に応じていただくことが多かった。

通史執筆のための資料については、学内・学外を二大別した。各部局開設以後の資料は学内にあるが、創立に際しての資料は、学内で求めることはまず難しい。とくに創立前史の資料は、その全てを学外に求めなければならなかった。これらの資料はそのほとんどを複写し、事項別編年別に整理した。年史編集を機として、資料の収集保存はことのほか痛感され、講義題目や学生便覧、アジビラのような一見片々たるパンフレットの類でも、大学史を編む場合には、きわめて貴重な資料であることが確認された。

通史＝大学史はその時点その時点において大学が基本的問題としたところのものを的確に把握し、歴史の中に位置付けるべきであろう。大学の任務は、いうまでもなく学術研究と教育にある。これは大学の不変的性格である。しかし研究と教育の内容そのものは、学問の発展と時代の状況によって変化することがある。その意味で形としての不変ではありえない。大学における「不易」と「流行」は、研究と教育の内容において常に問いたださねばならないものである。「大学の基本的な問題」というのは、実はこのかわり合いの問題である。これの研究史的側面は学術史で委曲がつくされている。通史ではこのかわり合いを、学術的側面を考慮しながら、主として制度的な展望をこころみていった。

「大学の基本的問題」を探る資料操作としては、次のような方法をとった。まず、その年次における各部局のもっとも基本的な資料—主として教授会記録—を横断的にみってみる。そこには大学全体として判断しなくてはならぬ問題がある。あるいは

は一部局の問題を大学全体として考えねばならぬこともある。その横断的な整理を経た資料を評議会の資料と対応させて問題を決定した。ところが、公式の記録はおおむね結論だけしか書いてない。一つの結論に至る過程こそが、大学発展のダイナミズムを示すが、それには新聞資料や関係者からの聞き取りなどの傍証資料が役立った。

こうして国の教育行政、大きくは国の命運のなかで、いわば歴史の中の大学として九州大学を位置付けることを意図したのである。いうまでもないが、記述にあたっては客観的であることを厳に守り、価値判断を排することにつとめた。同時代史を書くことはきわめて難しい。まだ歴史的評価のできない問題が多々ある。昭和も30年代に入ればとくにそうである。事象の復元に際して直接徴すべき関係者の記憶とくい違う場合がある。しかし、記録とても決して万能とはいえない。そのような場合には執筆者が材料を彼此勘考して判断せざるをえなかった。

なお記述に際しては以下の点に留意した。各事象（各節）を順次記述した。各事象は、できるだけ完結的に叙述しようとしたので、節と節の間はやや独立的になった。記述にあたっては、創立前史の調査・執筆に少なからぬ努力を払った。文・法・経各学部に分化する前の法文学部については学術史では一学部として取り扱われることなく、文・法・経各学部で個別的に関説されているので、通史ではやや詳しく叙述した。

通史は、五十年史とはいふものの、福岡藩の教育機関である賛生館時代から数えると約百年間の記述となる。この間の基本的な問題を探ることは、執筆の間におのずから叙述における力点として、自覚されてきた。第一に、大学の発展はまずなによりも学問の分化発達と、それに深く関連する産業の発展に照応する。そしてそれは講座数の増加に指標的に具現する。附置研究所の設置や、工学部や医学部の講座増設などがこれである。九州大学に限ることではないが、大学にはまた、体制の向いている方向を利用してその発展に資そうとする姿勢がある。満州事変を機として、学内の研究機能を動員して満蒙関係の研究所が作られようとした。日本の、いわゆる南進にともなって南方関係の研究所設置ももくろまれた。戦時下の相次ぐ研究所の設置もこの方向で理解される。大学発展の契機をどのような姿勢で把握するかは重要な問題であろう。

次に、大学の機能の主要な部面を占める教育に

ついて考える場合、学生の自主的な側面での動きは重視すべきである。通史では、この学生の動きを追うことにも力が注がれた。学生の自主的な研学精神が九州大学を発展させる根源的なエネルギーであったという、いわば自明のことが改めて発見できたのは、当然のこととはいいながら、非常なよろこびであった。

また、国の命運の中での大学の在り様にも気を配った。近代の日本の歩みは戦争とともにあった。大学がそのらち外にあるはずがない。戦争の長期化と深刻化にともなう研究内容の変化については前にのべたが、学園自体の軍国的体制化は年とともに強化されていった。その意味で大学における軍事教練の問題を重視した。これは報国隊・防衛団の定石をふんで、学徒出陣として散華する。戦争という異常な事態は、他大学に例をみない軍人総長の実現をみ、生体解剖事件の悲劇をも生んだ。戦後の大学は、戦前におけるいとなみの断罪から出発した。

通史を編むにあたって資料収集にはことのほか苦心した。例えば、留学生の問題は通史に是非とも加えなければならない重要な項目であるが、その実数および実態を調査するのには困難を感じた。

大学に残す文書はその種類によって保存年限に区分があるが、短期間のものでも、大学史編集の立場からすれば、整理保存しておくべきものもある。大学のいとなみを跡付けうる資料の収集・整理・保存はきわめて緊要であり、そのための機能はどこかで果たさなければならない。大学における日々のいとなみの意義を確認してこれを客観化し、正確な資料として残し、大学の果たす文化史的意義を総和的に認識する態度が望まれる。このことは、大学の使命を誤りなく効率的に達成するために、もっとも肝要なことではなからうか。新たに発足した大学史料室の存在意義も、この点にあるといえるだろう。

最後に九州大学五十年史通史を編集・執筆しての私懷を一言。通史の編集・執筆に際していろいろな学問とそれらを大きく推進された先学にあい、さまざまなことを学びえた。そして、大学で研究する姿勢について深く学ぶことができた。五十年史編集の5年の間、従前にながしか志していた自分の研究はスクラップ同然になったが、通史編集を通じて学びえたことの深さを思えば意とするにたりない。

(九州大学名誉教授)

九州帝国大学要覧

九州大学は、戦前の帝国大学の時代から、大学自体の活動を報告・紹介するために、『九州大学一覽』、『九州帝国大学要覧』、『KYUSHU IMPERIAL UNIVERSITY CALENDAR』、『KYUSHU UNIVERSITY CATALOGUE』といったいくつかの一覽、要覧、概要類を刊行してきた。『九州大学一覽』については前号にふれたので、今回は九州帝国大学要覧を中心に説明を行ってみたい。

九州帝国大学要覧と名付けられた刊行物は、現在のところ写真のように3種類のものが知られている。そのうち最初に出されたものは、1916年（大正5）11月の『九州帝国大学要覧』（写真上）で、これはその序に「今茲ノ秋肥筑ノ野ニ陸軍特別大演習ヲ挙行（中略）畏クモ本九州帝国大学ニ臨御ノ栄ヲ賜フ」とあるように、大正天皇の本学への臨御を記念して作られ、同行した寺内正毅総理大臣以下、内務、陸軍、海軍、文部大臣等の参列者に贈呈されたものであった。

印刷は東京の東京図按印刷社。大きさは縦24cm横33cm、全64頁である。巻頭に沿革略、諸名簿、統計等が付けられているが、中心は医科大学関係23枚、工科大学関係23枚、合計46枚の学内建物・施設の写真であり、実体は九州大学の記念写真帖

であった。同様の写真帖は1920年（大正9）4月の東宮（のちの昭和天皇）来学の際にも作られたが、このときのタイトルは「要覧」ではなく、内容に即して『九州帝国大学写真帖』とされた。この2つの刊行物は、九州大学が初めて作成した写真帖（要覧）であり、以前から出されていた分科大学の卒業記念写真帖等とともに、草創期の本学の様子を伝える貴重な史料となっている。

二つ目の九州帝国大学要覧は、1925年（大正14）3月に創刊され、以後1939年（昭和14）5月まで年刊のかたちで出されたものである（写真下左）。戦前期の大学要覧といえば普通この要覧を指し、15年間に合計14冊が刊行された。大きさは菊版で平均頁数は110頁。印刷は一貫して九州帝国大学印刷所で行われた。九州大学では1921年（大正10）12月に大学印刷所を設置し、1922年以降は、それまでいくつかの業者によって行われていた『九州帝国大学一覽』の印刷も同印刷所でなされるようになっていたので、要覧についても同様の措置が取られたものと思われる。

要覧の構成は、「沿革概要、大学に関する法令、概況、記念供覧建物特別陳列品、通俗講演会、附図（写真・平面図）」からなり、巻末附図の写真が1932年（昭和7）以降付けられなくなったほかは、その構成に全く変化がみられない。内容をやや詳しく見るために、法文学部が開講したばかりの1926年版（大正15）の細目次を引用してみると、「沿革概要」に引続き、「大学に関する法令」として大学令、帝国大学令、九州帝国大学官制が、「概況」として各学部における講座及授業科目、学士称号・大学院・専攻科及委託学生、敷地及建物、図書館、臨海実験所、印刷所、医学部附属医院、農学部附属農場、農学部附属演習林、建築工事、奨学資金、大学紀要、福岡医科大学雑誌、農学部農芸雑誌、職員、学生・生徒、卒業生が、「記念供覧建物特別陳列品、通俗講演会」として各学部の特別陳列品と通俗講演会が、「附図」として新設の法文学部・附属図書館関係の写真と、九州帝国大学平面図が収められている。

「概況」など前半部分は、『九州帝国大学一覽』との重複も多いが、後半の「記念供覧建物特別陳列品、通俗講演会」は、要覧独自のものであった。例えば1926年版（大正15）の「記念供覧建物特別陳列品、通俗講演会」には、特別陳列品・供覧と



して医学部の「心臓の標本供覧」ほか2点、工学部の「リレー」式自動電話」ほか1点、農学部の「血清学上より見たる水禽の類縁関係」ほか1点、法文学部の「世界に於ける我国勢現状及び六大都市に比較せる福岡市勢現状一覧」ほか3点の、説明文と資料・写真が60数頁にわたって所収され、通俗講演会として植村恒三郎「林相より観たる千代の松原」、大森研造「欧州の現状と我國民の覚悟」の2つの講演題目が掲げられている。

ところで、要覧の構成がこのようなものになったのは、要覧が大学の記念日のために刊行されたからであった。大正中期以来、九州大学は大学の記念日に学内の供覧を行い、また同時に通俗講演会を開催していた。要覧は学内配布用と記念日に招待される来賓用に大体500部ほどが印刷されたが、前述した要覧の「記念供覧建物特別陳列品、通俗講演会」の部分は、記念日当日に供覧にふされる学内施設や陳列品の説明書の意味を持っている。このような記念日における目録等の作製は、既に要覧が刊行される以前から行われており、「九州帝国大学概況」と「特別陳列品目録及説明書」という2つの小冊子が印刷されていた。要覧はこの2つを合わせて、「九州帝国大学概況」を前半部分に、「特別陳列品目録及説明書」をその後半部分に入れるかたちで刊行されたのである。

要覧の刊行日は、1925年(大正14)～1933年(昭和8)の間は3月1日、1934年(昭和9)～1939年(昭和14)の間は5月10日であった。九州大学の記念日は創立から1933年までは、1886年(明治19)の帝国大学令公布を記念して3月1日に、1934年以降は、天皇親署の教育勅語が本学に下賜された1911年(明治44)5月11日を記念して、5月11日に規定されていたから、いずれの時期にも記念日当日かその前日の日付で出されたことになる。1927年(昭和2)の要覧が刊行されず、1936年(昭和11)のものが10月31日付で出されたのは、前者は大正天皇の諒闇により記念日自体が開催されず、後者はより大がかりな九州帝国大学創立25周年記念式典が同年11月に開催され、要覧の発行がこの式典に合わせられたからであった。

要覧の表紙に毎年掲載図のような紋章が付けられているのも、記念日との関係ゆえであろう。この紋章は学位記用の図案として、1920年(大正9)に東京美術学校に依頼して作製され、文部・宮内両省との交渉の結果、「差当り学位記ニ附スルコトニ決定シ基他ノモノニ附スルコトハ尚考慮スル」とされたものであったが、学位記以外の使用が知

られるのは、この要覧と一部の『KYUSHU IMPERIAL UNIVERSITY CALENDAR』の表紙ぐらいである。



なお九州大学の行った学内供覧・通俗講演会について、少し説明しておく、

これらは学内関係者や来賓に対してだけ行われたのではなく、広く一般市民にも開放されていた。学内供覧と講演会は、大学創立当初は必ずしも記念日に行われるものではなかったが、大正中期からは一緒に記念日に行われるようになり、「福岡市の一行事」といわれていた。例えば工科大学が供覧にふされた1917年(大正6)の場合、一般の参観者は1,800名の多数におよんでいる。例年の盛況を地元の福岡日日新聞は、「九大記念日の賑ひ / 工学部に押し寄せた観覧者の群れ / 大学趣味の女優鬘が多かつた」(1921.3.2)などと報道した。

大正の末期に九州帝国大学要覧が創刊された事情は必ずしもはっきりとしないが、上にみたような大学の活動が、その前提にあったであろうことは想像に難くない。要覧の刊行は1940年(昭和15)以後、物資不足のため中止となったが、記念日の式典自体は行われ、要覧に代わって簡単な説明が付けられた「陳列品目録」が作製されている。

三つ目の『九州帝国大学要覧』(写真下右)は、戦時中の1944年(昭和19)に出された。大きさは四六版、内容は6種類の九大関係の官制のほかは、学位関係の規程と九州帝国大学通則のみという、全部で39頁の小冊子(法規集)である。他の大学出版物との関連でいえば、『九州帝国大学一覽』との関係が深く、その内容はすべて従前の一覽に所収されるはずのものであった。一覽が前年度の昭和18年版を最後に中絶したので(実際の発行は1944年3月)、これを補うために出されたものだったのかもしれない。したがって表紙に「昭和十九年」とあるが、刊行年月は1945年の3月まで下る可能性もある。ただしその上限については、軍需科学の研究機関として創られた木材研究所の官制が入っている点からして、同研究所が設立された1944年5月以降であることは間違いない。

1944年4月に改正された通則の頁数が半分以上を占め、その第3章第3節には前年10月に発足した大学院特別研究生に関する規程(全部で11条)が入っている。また巻末には1942年10月に制定された通則「臨時規程」が入っており、全体として臨時的な、戦時色の濃い内容となっている。(O)

沿革史紹介 (1)

九州大学五十年史 通史

九州大学は1961年に創立50周年を迎えた。これを記念して編集されたのが、本通史と学術史上・下巻2冊からなる九州大学五十年史である。このうち通史は1962年6月に編集が開始され、5年後の1967年11月に刊行された。

A 4版。702頁。九州大学で最初の全学的な通史であり、当時としては珍しく横組みで印刷されている。「第1編 創立前史」から「第6編 戦後改変時代」までの全6編で構成され、本学の淵源である福岡藩の医育機関＝養生館から創立50周年の1961年までが扱われている。この期間は、近代国家の誕生から、戦後の高度経済成長が始まろうとする時期にあたっていた。本通史はこの間の九州大学の歴史を、議事録、新聞、雑誌、聞き取り調査などの豊富な史料によってあとづけている。

大学独自の問題だけではなく、大学と国家・社会の関係にも注意が払われ、たとえば、地域における大学誘致運動や、各学部の設置運動、内外の政治状況が直接に反映される戦時体制下の大学などについても、詳細な記述がなされている。

九州大学五十年史 学術史 上巻・下巻

学術史上・下巻は通史とともに、1967年11月に刊行された。A 4版。上巻841頁。下巻856頁。いわゆる部局史に相当するが、通史と独立したかたちで編集された年史としては、最も早い時期に属するものである。創設された順に、上巻に医、工、農学部が、下巻に理、文、法、経、教育学部と分校(教養部)、各研究所、附属図書館が収録されている。

この学術史の編集は、それ以前に年史を刊行していた医学部以外の部局にとっては、初めてのことであった。最初に部局の略史が置かれ、次に学科、あるいは教室別に各部局の歴史が書かれているが、力点の置き方、写真、図表の利用など、そのスタイルは必ずしも統一されていない。しかし、その名を学術史としているように、各部局創立以来の研究・教育活動の足跡が、講座の設置・改編、教官の人事異動や研究業績などにより、詳細に叙述されている。

九州帝国大学医学部二十五年史

1928年10月刊行。菊版。696頁。1928年は医学部の前身、京都帝国大学福岡医科大学が創設されてから、ちょうど25周年にあたった。1903年4月、京都大学の一分科として始まった医科大学は、8年後の1911年4月に工科大学と一緒に九州帝国大学となったが、医学部の創立はこの福岡医科大学の創立をもって数えている。

本年史は九州大学で最初の部局史であり、その構成は、「上編 福岡医科大学創立以前」「中編 福岡医科大学時代」「下編 九州帝国大学・医学部時代」の三編と、別録、附録からなっている。上編には大学設置運動の経過が、中、下編には1903年以降の歴史が、医科大学と附属医院に分けて収録されているが、これらは主に「九州帝国大学沿革史料」の記事を基礎に書かれている。これに対し、別録の「各教室の沿革」は25年史に際し新たに編集されたもので、解剖学教室以下の各教室史である。附録には「医学部集談会」「財団法人恵愛団」など、医学部諸団体の略史が収録されている。

九州大学医学部五十年史

1953年5月、医学部は創立50周年を迎え、記念式典を開催した。本年史はこれを記念して編集され、同年12月に刊行された。

B 5版。393頁。版型がB 5版と大きくなり、25年史の部分が「二十五年史抄」として巻頭に置かれたほかは、「九州帝国大学(九州大学)医学部(昭和三年以降)」「各教室及び各部局の沿革」「附録」と、以前の25年史の構成・形式とほとんど変化がみられない。ただし、この年史に収録された時代は、あいだに日中戦争、太平洋戦争といった大きな戦争があり、内容的にはやはり戦争の影響を強く受けたものとなっている。民族及び植民衛生学講座の増設や、軍医養成を目的に設置された附属医学専門部に関する記述などは、その典型的な事例であろう。

なお巻末の「(追記)九州大学医学部の前身について」は、「福岡医学校関係物故者追弔会記事」(昭和8年)の一部再録であるが、創立前史に関する重要な史料である。

受 贈 図 書 一 覧 (1993年1月～6月)

明治大学史紀要 第10号		荒川信生	1971. 2
明治大学百年史編纂委員会	1992.12	ネパール・ヒマラヤ遠征隊報告書	
追悼集—同志社人物誌 昭和10年～昭和12年 VI		九州大学山岳会	1971
同志社社史資料室	1993. 1	壬子会誌 六十周年記念	
吉岡彌生略年譜 東京女子医科大学の歩み		九州大学工学部土木工学教室	1972.12
東京女子医科大学大学史料室	1990. 2	心身一如の健康法	
東京女子医科大学 今と昔 1900—1990		池見西次郎	1974
東京女子医科大学	1990.12	マルクスとケインズの対話	
桃山学院年史紀要 第12号		高橋正雄	1975. 1
桃山学院年史委員会	1993. 3	流れのままに—私の九大生活四十余年の思い出—	
立正大学フォーラム記録集		篠原謹爾	1975.11
立正大学	1993. 3	老樟のほとりで	
専修大学110年		西高辻信貞	1975.12
専修大学	1989. 8	入江英雄随想集 あけぼのつつじ	
立命館百年史紀要 第1号		入江英雄	1976. 2
立命館百年史編纂室	1993. 3	偲徳 橋本策博士顕彰記念	
立命館百年史資料集 第1集		阿山医師会	1976. 3
立命館百年史編纂室	1993. 3	学問の神様 太宰府天満宮と天神信仰	
九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区		西高辻信貞	1977. 1
遺跡群— (第2冊)		うたかた	
九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室	1993. 3	本江元吉	1977. 6
神奈川大学史資料集 第9集 国立公文書館所蔵		何でも語ろう	
横浜専門学校資料 (3)		入江英雄	1979. 1
神奈川大学	1993. 3	追想の青山道夫—民主主義と家族法—	
同志社談叢 第13号		大原長和・黒木三郎	1979.11
同志社社史資料室	1993. 3	田村圓澄著作目録	
東北学院の100年		田村圓澄	1980. 3
東北学院	1986. 5	八方破れ・私の社会主義	
東北学院百年史		高橋正雄	1980. 7
東北学院百年史編集委員会	1989. 5	高田保馬博士の生涯と学説	
東北学院百年史 資料篇		高田保馬博士追想録刊行会	1981. 1
東北学院百年史編集委員会	1990. 5	歌と絵 南公園	
東北学院百年史 各論篇		河田政一	1981.11
東北学院百年史編集委員会	1991. 5	今中次磨 生涯と回想	
成瀬記念館 No.8		今中次磨先生追悼記念事業会	1982. 4
日本女子大学成瀬記念館	1992.12	随想集 1931～1981 閑雲野鶴	
東京大学史紀要 第11号		河田政一	1982. 9
東京大学史料の保存に関する委員会	1993. 3	迷路金印考	
東京大学史史料室ニュース 第10号		河田政一	1983. 7
東京大学史史料室	1993. 3	DR. MASUNORI HIRATSUKA: A MEMORIAL VOLUME	
資料 この1年		Dr. Hiratsuka Memorial Society	1983
入江英雄	1970. 9	法医一代	
私をめぐるこの一年		牧角三郎	1984. 2
入江英雄	1970.10	寸感集—わが大学・病院・家—	
父・荒川文六		柳瀬敏幸	1986. 8

黒姫 医学身辺雑記		田村圓澄先生古希記念会	1987.10
石田名香雄	1987. 6	50年のあゆみ	
大宰府の春 回顧七十年		学校法人福岡建設専門学校	1992.11
田村圓澄	1987.10	明治の敢言	
田村圓澄先生年譜・著作目録		高田源清	

大学史料室日誌抄録 (1993年 1 月～ 6 月)

1.14 (木)	第 1 回大学史料室の運営に関する懇談会開催。	29)。	
1.21 (木)	第 2 回大学史料室の運営に関する懇談会開催。	3.30 (火)	附属図書館へ長期借用図書返却。
1.28 (木)	平成 5 年度教官定員運用要望書提出。		高野アイ子工学部教務課長より史料寄贈。
2. 1 (月)	兼任教官発令 (～1995.1.31)。 有馬 学文学部教授 新谷恭明教育学部助教授 植田信廣法学部教授 東定宜昌石炭研究資料センタ ー助教授	3.31 (水)	松下室長退任。
2.18 (木)	第 1 回大学史料室運営委員会開催。	4. 1 (木)	津守常弘経済学部元教授より史料寄贈。
2.19 (金)	教官定員運用委員会開催 (松下委員長出席)。	4. 7 (水)	第 2 回大学史料室運営委員会開催。
3. 2 (火)	柴多講師、折田助手埼玉県立文書館視察。	4. 9 (金)	第 5 回専門委員会開催。 『大学史料室ニュース』第 1 号発送 (～4.13)。
3. 4 (木)	『大学史料室ニュース』第 1 号原稿入稿。 庶務課より旧大学資料室資料移管。	4.14 (水)	建物正面に「九州大学大学史料室」の看板取付け。
3. 8 (月)	第 4 回専門委員会開催。	4.15 (木)	第 4 回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。 有馬学委員長九州大学大学史料室長に就任。
3.17 (水)	『大学史料室ニュース』第 1 号刊行。 大槻昭一郎理学部教授より史料寄贈。	4.21 (水)	平成 5 年度振替要求書提出。
3.18 (木)	第 3 回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。	4.26 (月)	原田実経済学部元教授より史料寄贈。
3.22 (月)	有馬学文学部教授より史料寄贈。	4.30 (金)	『九大学報』1321号に施設紹介「九州大学大学史料室」掲載。
3.23 (火)	教官定員運用委員会開催 (大学史料室運用定員決定)。	5. 1 (土)	兼任教官発令 (～1995.4.30)。 荻野喜弘経済学部教授
3.25 (木)	『大学史料叢書』第 1 輯刊行。	5. 6 (木)	第 3 回大学史料室運営委員会開催。
3.26 (金)	『大学史料叢書』第 1 輯発送 (～3.	5.17 (月)	奥田武男名誉教授より史料寄贈。
		6. 8 (火)	予算経理委員会開催 (有馬委員長出席)。
		6.29 (火)	評議会開催 (大学史料室振替額決定)。

九州大学大学史料室ニュース 第 2 号

発行日 1993年 9 月20日 (年 2 回)

編集発行 九州大学大学史料室
福岡市東区箱崎 6-10-1
電話 (092) 641-1101 内線 2298
印刷 九州大学印刷所

Archives of Kyushu University